

## 多様化する沖縄詠 屋良健一郎

二月五日に那覇市で開かれた「時代の危機に立ち上がる短歌」の報告が各誌に掲載されている。「うた新聞」三月号（田村元）、「現代短歌」四月号（三枝昂之）、「歌壇」五月号（加藤英彦・名嘉真恵美子・久々湊盈子）の他、「朝日新聞」二月二十日の短歌時評では松村由利子が、「東京新聞」二月十八日夕刊の短歌月評では光森裕樹が書いている。私も「東京新聞」二月二十日夕刊、「現代短歌新聞」三月号に執筆した。シンポジウムには私も登壇したのだが、その際にとりあげた歌をここでも紹介したい。

- ・赤花アカバナが映える青空特大の基地のハンバーガーが食べたい
- ・渋滞のイライラが増す月曜の九時五時勤務のプラカード隊
- ・潮風がぬるくて強いドライブのBGMの米軍放送

「現代短歌」二月号の花本文香「地図の空白」七首より。花本は沖縄出身の若手である。一首目、「アカバナ」はハイビスカスのこと。沖縄の歌人は赤い花を戦争の悲惨さや基地への怒りと共に詠むことが多いのだが、ここでは違う。ハイビスカスと青空が作り出す美しい景色は「基地のハンバーガー」に爽やかなイメージを与える。「基地のハンバーガー」に惹かれる作中主体は、三首目では米軍向けの放送を当たり前のように聴いている。そこには、基地がもたらす文化を当然のように享受する若者の姿がある。

- ・普天間の移設反対言いつつも何気にみんな祭りに参加

板谷拓郎『識名園歌会 第十二回作品集』（二〇一〇年）

沖縄の短歌コンクールで出会った一首。作者は高校生。普天間基地でフェスティバルが開かれる日に、家族や友達と基地内へ行くことを楽しみにしている沖縄県民も少なくないだろう。この歌も花本の歌も、基地が生む娯楽の享受を詠むと共に、抗議活動をする人々へのシニカルな視線を持つ。従来の沖縄の歌にはあまり見られなかった内容だ。松村も「朝日新聞」の時評で花本の歌などを引用し、若手の歌の「多様」性に注目している。

文学研究者の小嶋洋輔は、佐藤モニカの小説に「被害者という役割のみに収まらない『沖縄』の姿」、「総意」や『オール沖縄』という言葉を疑いたくなるような『沖縄』の多様化を見ており、沖縄を理解するには「単純に固定化することよりも、その多様化を知ることが必要」と述べる（小嶋洋輔『『沖縄』と『文学』（二〇一五）―第四五回九州芸術祭文学賞、佐藤モニカ『カードイガン』から』『現代文学史研究』第二二集、二〇一五年）。この指摘は沖縄の短歌を考える上でも重要だろう。沖縄の歌人たちは反基地の思いを短歌に託してきた。歌人に限って言えば、沖縄のほとんどの人が辺野古移設に反対だろう。しかし、その勢いは短歌の外の現実と乖離したものではないかという懸念は、二〇一四年の名護市長選の激戦や、最近の県内の選挙での「オール沖縄」陣営の相次ぐ敗北を見ていると強くなる一方だ。現実の世界は、短歌で切り取られた世界よりもずっと繊細で複雑だ。

これまであまり詠まれてこなかった、しかし以前から確かにあったはずの沖縄の現実が、沖縄詠の「多様化」という形で若者の作品に顔を出し始めている。この「多様化」も大切にしながら、「時代の危機」の中でどう表現できるのか、考えていきたい。